

平成 20 年度購入文化財一覧

【九州国立博物館】(計23件)

- 1 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 春夏耕作・秋冬山水図屏風
 (しゅんかこうさく・しゅうとうさんすいずびょうぶ)
- 員 数 6 曲 1 双
 ○作 者 等 伝狩野元信筆
 ○時 代 室町時代・16 世紀
 ○品 質 紙本墨画淡彩
 ○寸 法 等 各 縦 156.2 横 353.4 cm
 ○作品概要 右隻には耕作の情景があり、右側の梅の花咲く春景には牛を用いて犁で田をおこし、籾の籠をはこぶ場面を表す。中央の家屋をへて、左側には田植えと灌漑、草取りなど夏景を描く。足利将軍家が所蔵した梁楷の耕作図巻の図様を参照したモチーフで、狩野元信(1477-1559)の様式による表現。元信の基準作のなかでも天文12年(1543)の琴棋書画図(霊雲院蔵)に近い。本図は、樹木の表現にデフォルメと特徴ある形態から、霊雲院本よりもやや遅れる時期に元信周辺の画家が制作したものと考えられる。
- 左隻の山水の情景では、右側に紅葉のある水辺の東屋と集落、落雁、満月によって秋景を描く。中央の遠景の漁村をへだて、懸崖と楼閣を中心とする左側には積雪により冬景を表す。これらの場面のうち、水辺の東屋は伝閻次于筆鏡湖帰棹図(台北故宮博物院蔵)、懸崖の瀑布にかかる建物は伝夏珪筆雪景山水図(台北故宮博物院蔵)などの室町時代に流布した中国絵画の図様を継承するものである。その表現は、とくに岩の皴法や柳樹の描法が霊雲院本に類似し、さらに岩の形態が誇張されて複雑になっている。そのため本図は、霊雲院本よりも少し降る時期の元信様式をよく伝えるものとみられる。
- このように本図は二つの主題により構成される点が珍しいが、左隻のみに印章がある点は注意される。これは山本英男氏が分類する「元信」印(「印からわかること-元信印の場合-」『学叢』第21号)のうち天文年間(1532-1554)を中心に用いられたA2印に相当すると思われるが、捺印の場所が二画面の中央寄りと異例で、かつ右隻には印影が確認できないなど検討を要するものである。また各隻の描写には多少の相違がみられるが、上記のように両者の年代は同時期であり、全体的には様式的な共通点が多い。そのため両隻が当初から一雙として制作された可能性は高いと考えられ、本図は室町時代の狩野派作品のなかでも元信の在世時にさかのぼり、また耕作と山水という異なるテーマをまとめた一本として、注目すべき作品と位置付けられる。
- 購入金額 40,000,000 円



右隻



左隻

- 2 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 山水図 (さんすいず)
 ○員 数 1 幅
 ○時 代 朝鮮時代・16 世紀
 ○品 質 紙本墨画
 ○寸 法 等 縦 43.4 横 30.4 cm
 ○作品概要 掛幅装。画面は上下に二分され、その下方の近景には水辺の景観が表される。その右下に斜めに配置された土坡には、大きな蟹爪樹が二本描かれる。その左側の一本は淡墨で丸く葉を線



描した常緑の車輪松であるが、右側は落葉した枝に芽を点描するため、早春の樹木を表現すると思われる。その上方の懸崖には東屋があり手前に人物を配するが、その三人のうち中央・右側の人物は竿・琴を持つとみられる。右下の土坡の奥には楼閣と円錐形の樹木などが連なり、最も左側にある一階建ての建物には特徴的な庇が、水辺の船には棹が描き込まれる。画面上方の遠景には、遠山と樹木が描かれる。

その画面は中央左寄りに紙継があるなど、本紙は制作時の状態から何らかの変更が加えられている可能性があり、後補の部分に補筆も認められ注意が必要である。しかし本図には近景の蟹爪樹と円錐形の樹木、遠景の短線点皴などに朝鮮時代・16世紀中葉の山水画の特徴がよく示されており、その整った様式は注目に値する。とくに懸崖上の人物の持物、船の棹や建物の庇などには繊細な筆線による描写がみられるため、本図は、小画面ながらも表現の優れた朝鮮山水画であると評価できる。

○購入金額 3,150,000円

- 3 ○種別
○名称
○員数
○時代
○品質
○寸法等
○作品概要

<絵画>
絹本着色羅漢図 陸信忠筆
(けんぽんちゃくしよくらかんず りくしんちゆうひつ)

1幅
中国・南宋時代・13世紀
絹本着色
縦 54.1 横 36.5 cm
掛幅装。画面は全体に暗く、状態は横折れに起因する欠損も部分的に認められるが、全容はよく保たれている。軸端は木製漆塗りである。緑と白の内衣に団花文のある赤い衲衣をまとった羅漢が、右手を念じて黒雲から湧出する龍を見上げながらゆったりと緑色の玉座に坐す。その玉座には宝珠や唐草、龍などの細かな装飾があり、羅漢の背後には淡い桃色で縁取った白い法被が掛けられている。玉座の後方には緑や桃色、金色からなる甲冑を着け、獅子冠をかぶり胸前で合掌する神将形が立つ。その作者は、画面左上の落款によれば陸信忠とされる。彼は寧波が慶元府と呼ばれた時期(1194-1277)に当地で活躍した職業的な仏画師であるが、その落款をもつ絵画には陸信忠工房の作品が含まれることが指摘されている。落款は、この画家の小画面の現存作例に共通する細字でやや太い書体に近似するため、陸信忠あるいはその工房の作品とみて問題はない。絵画表現については後述のように、陸信忠の様式としては類例の少ない傾向を示すものの、その年代は画家の活躍期である南宋時代・13世紀に相当すると理解できる。とくに彩色と線描が丁寧で表現が優れているため、本図は工房の主宰者である陸信忠の筆になるとみてよいと考えられる。

なお、画面の右側上端、龍の右隣には蓮台上に赤色で縦長の短冊形の部分がある。赤外線撮影を試みたが、保存状態が悪いため銘文等は判読できなかった。

○購入金額 70,000,000円



- 4 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 紙本墨画淡彩 琴高仙人・牧童・高士観梅図 拙宗等揚筆
 (しほんぼくがたんさいきんこうせいにん・ぼくどう・こうしかんばいず せつそうとうようひつ)
- 員 数 3 幅
 ○時 代 室町時代・15 世紀
 ○品 質 紙本墨画淡彩。
 ○寸 法 等 各最大径 33.0 cm
 ○作品概要 掛幅装。状態は擦れや横折れに伴う小さな浮きがあるものの、画面は概ね保存されている。軸端は象牙。一具として伝来したこの3幅は、ともに上下が少しくぼんだ団扇形であり、縦の折れ跡がほぼ中央に見えることも共通する。表装に関しては、折れ跡から考えれば、ある時点で3点とも画帖に貼り付けられていたかと想定される。
- その画題を確認すると、勢いよく躍る魚に跨る口髭をたくわえた道士を靄のなかに描く1幅は、琴高仙人図と考えられる。つまり琴の名手である中国の仙人・琴高が、再会を約束した知人の前へ鯉に乗って出現する場面を表すとみられる。
- 墨と水色で線描された枝を垂らす柳の下で、童子が牧牛に乗り笛を吹く1幅は、牧童図とみてよい。とくに牛に乗る童子が笛を吹くさまを重視すれば、禅宗の修行の過程を表す十牛図のうち人と牛が一体となる境地を描いた「騎牛帰家」との関連が想定される。
- 頭巾をかぶり合わせた両手を着衣で隠す高士が、枝先に赤い芽をつけた梅を見つめ水辺の山道に佇む1幅は、高士観梅図とみなせる。さらに画題を絞り込むなら、この高士をこよなく梅を愛した北宋時代の詩人・林逋(林和靖、967-1028)と理解することもできるかも知れない。
- これらの作者については、3幅に共通する印章からともに15世紀に活躍した拙宗等揚と考えられる。この画家の名前は現在の学界では、雪舟等揚(1420-1506?)が「雪舟」を名乗る寛正6年(1465)頃以前に使用した道号・法諱であると考えられる学説が極めて有力である。これに従うなら本図は、線描・構成ともにやや素朴さが残るものの、室町時代の代表的な画家・雪舟が中国渡航(1467-69)以前に制作したものと説明できる。



琴高仙人図



牧童図



高士観梅図

○購入金額 70,000,000 円

- 5 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 紙本墨画月夜山水図 (しほんぼくがげつやさんすいず)
 ○員 数 1 幅
 ○時 代 室町-安土桃山時代・16 世紀
 ○品 質 紙本墨画
 ○寸 法 等 縦 93.2 横 39.8 cm
 ○作品概要 掛幅装。横折に伴う擦れが一部見られるものの、状態は概ね良好である。軸端は象牙。
- 画面は3つの場面に分けられる。下方の松のある近景では、高士が荷物を担ぐ従者を連れ、土坡の背後に見える梅に向かい小道を歩んでいる。梅の枝先には濃淡の異なる点描により花卉が表現される。本図の中央を大きく占める中景には、下方から延びる小路に従者が、その先の東屋に観瀑する2人の高士が描かれる。背後の山上には積雪がみえ、手前の松でも蔦が風になびくなど、天候を示す描写が注目される。遠景には舟が3艘みえ、満月のもと湖で釣りをする様子が描かれる。これらの3場面はそれぞれ探梅、観瀑、独釣をテーマとしている。
- その表現は、従者の荷物、釣人の釣竿や梅の花弁などをはじめ細部までよく描写されている。空間構成も、同一モチーフの粗



密や大小により各景の遠近感を表現するなど、全体的に正統な山水画の表現手法が用いられている。その様式は樹木や皴法に特徴があり、短く硬い線を何度も折り曲げ、点描を細かく重ねるなどの表現が看取できるが、これらは狩野元信（1477-1559）の様式を学ぶ室町時代末期から安土桃山時代初頭の後継者たちに通じ、本図もこのような狩野派の絵師が描いたものと考えられる。

なお朱文壺形印は「季正」と読める可能性があり、その形状は室町時代に狩野派が好んで用いたものである。

○購入金額 2,500,000 円

- 6 ○種 別 <絵画>
○名 称 紙本墨画淡彩観音図 （しほんぼくがたんさいかんのんず）
○員 数 1 幅
○時 代 室町一江戸時代・16-17 世紀
○品 質 紙本墨画
○寸 法 等 縦 105.3 横 45.5 cm
○作品概要 掛幅装。保存状態は概ね良好で、軸端は象牙である。画面中央を横切る湧雲の上方には、趺坐して腹前に印を結び、宝冠をいただいで耳環・胸飾・臂釧などをつける 2 臂の菩薩が表される。この尊像は、宝冠に阿弥陀と思われる化仏があることから観音とみられ、これと符合するように上部の賛文（賛者不詳）には「観音経」として流布する鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』「観世音菩薩普門品第二十五」の 1 節が記される。湧雲の下方には、宴会の場面で水辺に嘔吐する人物と従者、その光景を見つめる人物が描かれる。これは賛文が引用する「観音経」が説くように、呪われて毒薬による殺害が計画された者でも観音を念じれば呪いや毒は仕掛けた本人に戻る、という観音の利益を絵画化したものである。その作者・年代については、落款と印章によれば雪舟等楊（1420-1506?）が文明 18 年（1486）に制作したこととなる。ただしその描写には、観音の右足首、唇や小鼻などのやや不自然な表現や、化仏の省略された筆致などに模本的な性格が指摘できるため、年代を文明 18 年とすることは困難である。その一方で、金泥を多用し細部に赤や青などの彩色をほどこすなど、本図には雪舟の表現をよく伝えられる要素も留められている。



○購入金額 10,000,000 円

- 7 ○種 別 <書跡>
○指 定 重要文化財
○名 称 孤峯覺明墨蹟与保樹大姉法語
（こほうかくみょうぼくせきよほじゅだいしほうご）
○員 数 1 幅
○作 者 等 孤峯覺明(1271-1361)筆
○時 代 南北朝時代・14 世紀
○品 質 紙本墨書
○寸 法 等 本紙 縦 31.2 横 87.3 表装 縦 120.0 横 89.0
○作品概要 掛幅装。孤峯覺明は法燈派の僧。会津の生まれで、17 歳で良範講師に依って得度し、延暦寺にて受戒した。26 歳にして経論を捨て、紀伊由良の西方寺(のちの興国寺)にて無本覺心に 3 年のあいだ侍した。紀伊を出てからは、太宰府の南浦紹明にも参じている。応長元年(1311)40 歳で入元し、天目山幻住庵中峰明本に参じるなどした。帰国後は能登永光寺に曹洞宗の瑩山紹瑾に参じた。その後、南朝方の後醍醐天皇や後村上天皇の帰依を得て、雲樹三光國済国師の号を賜った。晩年は和泉の大雄寺に住し、91 歳で寂した。



本墨蹟は、年紀は無いが書風から見て晩年のものと推定されている。保樹大師という人に与えた法語。24行にもわたる大部なもので、悟道の要諦を説いている。最終行に「入宋比丘 孤峯覺明」と記されている。遺墨は、このほかに島根県・雲樹寺所蔵の一幅が知られるのみである。最晩年に揮毫された雲樹寺蔵の墨蹟にも「度(渡)宋比丘」とあり、終生、宋に渡ったことを誇りにしていたようである。

○購入金額 118,125,000円

- 8 ○種 別 <書跡>
 ○名 称 古筆手鑑 (こひつてかがみ)
 ○員 数 1帖
 ○時 代 奈良—安土桃山時代・8—16世紀
 ○品 質 紙本墨書・彩箋墨書・絹本墨書・紺紙金字
 ○寸法等 縦 40.9 横 54.0 cm
 ○作品概要 折帖装(手鑑装)。折帖の表裏各40面に総計122葉の古筆切が貼付され、それぞれに古筆極が添えられている。極の伝承筆者によれば、表は天皇・皇族・撰閔・公卿・名人51名、裏は能書・高僧・女人・武家・唐人68名の古筆切を貼付する。配列をみると、伝聖武天皇筆の「賢愚經断簡(大和切・大聖武)」を筆頭に、文化元年(1804)刊行の『古筆名葉集』などにみられる分類と配列でつくられた本格的な手鑑である。内容は奈良から桃山時代までの詩歌集や経典・公文書・漢籍・記録・縁起・式目など、幅広い分野におよんでいる。

○購入金額 65,000,000円



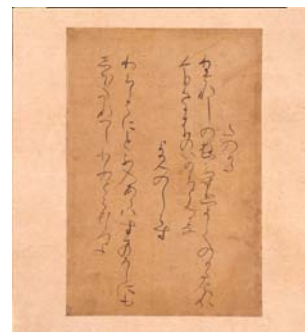
大聖武

- 9 ○種 別 <書跡>
 ○名 称 麗花集断簡(香紙切) 伝小大君筆
 (れいかしゅうだんかん(こうしぎれ)でんこおおぎみひつ)
 ○員 数 1幅
 ○時 代 平安時代・11世紀
 ○品 質 彩箋墨書
 ○寸法等 本紙 縦 20.9 横 12.1 表具 128.8 横 32.6 cm
 ○作品概要 掛幅装。『麗花集』の断簡。芳香を放つ料紙を用いて書写した古筆切であることから「香紙切」という。もとは粘葉装の冊子本である。香紙は丁子を煎じた煮汁で染め上げた紙で、色が美しく香りがよければかりでなく、防虫の効果を兼ねていたともいわれる。
 書風は細い線が自由奔放に躍動し、連綿の息が長いのが特徴である。このような嫺々たる筆線が女性の手を連想させ、古来、小大君(生没年未詳)の筆と伝えられてきた。小大君は平安時代中期を代表する女流歌人であり三十六歌仙のひとりであるが、能書であったという記録はない。

○購入金額 11,970,000円

※「10 後撰和歌集断簡(胡粉地切) 伝寂蓮筆」との合計額

- 10 ○種 別 <書跡>
 ○名 称 後撰和歌集断簡(胡粉地切) 伝寂蓮筆
 (ごせんわかしゅうだんかん(ごふんじぎれ)でんじゃくれんひつ)
 ○員 数 1幅
 ○時 代 平安時代・12世紀
 ○品 質 彩箋墨書
 ○寸法等 本紙 縦 20.1 横 14.2 表具 129.4 横 36.3 cm
 ○作品概要 掛幅装。『後撰和歌集』巻第十二・恋四の断簡。胡粉を引いた料紙を用いて書写した古筆切であることから「胡粉地切」とい



う。もとは粘葉装の冊子本である。貝殻を焼いて作った胡粉を楮紙に塗り、典雅な銀と金の砂子を撒いている。

字形は扁平であるのが特徴であり、線は比較的単調である。筆者は『新古今和歌集』を代表する歌人のひとり・寂蓮（1139-1202）と伝えられるが、自筆遺品とされる「一品経和歌懐紙」や「熊野懐紙」と比べると、同筆とは言い難い。しかしながら、いわゆる「寂蓮様」とされる書風であることは確かであり、彼と同時代の能書家の手によるものである。

○購入金額 11,970,000円

※「9 麗花集断簡（香紙切）伝小大君筆」との合計額

11 ○種 別
○名 称

<書跡>
紺紙金銀字陰持入経（中尊寺経）
（こんしきんぎんじおんじにゆうきょう（ちゅうそんじきょう））

○員 数
○時 代
○品 質
○寸 法 等

1巻
平安時代・12世紀
紺紙金銀字
表紙 縦 25.7 横 21.2 本紙 縦 21.2 全長 767.5、第1紙 47.4、第2紙 47.7、第3紙 47.8、第4紙 47.8、第5紙 47.8、第6紙 47.8、第7紙 47.8、第8紙 47.6、第9紙 47.7、第10紙 47.8、第11紙 48.0、第12紙 48.0、第13紙 47.9、第14紙 48.1、第15紙 48.0、第16紙 47.7、第17紙 28.8 cm

○作品概要

卷子装。軸端は撥型鍍金。表紙・本紙共に藍染めした紺色の料紙を用いる。表紙には金銀泥で宝相華唐花文と題箋を描く。題箋の中には「陰持入経一卷」と経典名・巻数を記す。見返しには金銀泥で靈鷲山釈迦説法図を描く。八双には竹を用いる。巻緒は新補。首題「陰持入経」と尾題「陰持入経一卷」は金字で書く。本文は17紙を貼継ぎ、銀泥で天地および縦界線（界高19.7、10行幅17.6）を引いた料紙に金泥と銀泥で一行おきに本文を書く。行17字詰。1紙27行（2紙目）。軸端には撥型鍍金魚子地四弁花文の軸首が装着されている。上軸と下軸の形や文様に差違があるので、片方、あるいは両方が後に付け替えられた可能性はあるが、二つとも平安時代の作と認められる。なお、現状の第9紙と第10紙の間に約3紙分が欠失している。

○購入金額 17,850,000円



- 12 ○種 別 <書跡>
 ○名 称 高麗再雕版大方等無想經
 (こうらいさいちょうはんだいほうどうむそうきょう)
- 員 数 6帖
 ○時 代 朝鮮・高麗時代・13世紀
 ○品 質 紙本墨摺
 ○寸 法 等 表紙 縦29.2 横12.1、巻第一 縦24.2 全長350.9、巻第二 縦24.2 全長568.7、巻第三 縦24.2 全長568.7、巻第四 縦24.2 全長532.4、巻第五 縦24.2 全長459.8、巻第六 縦24.2 全長453.8 cm
- 作品概要 折本装。巻第一が巻首から9紙半分を欠くが、他は完存する。各帖とも後補茶染紙表紙に金泥で「大方等無想經巻第一 大」等と經典名・巻数・千字文を記す。各帖首には「大方等無想經巻第二 大」と經典名・巻数・千字文があり(巻第一を除く)、尾には經典名・巻数がある。本文は1折12行、1紙2折24行、行14字詰、天地界線がある。界高は22.0。巻第二、四、六には尾題の後に刊記「癸卯歲高麗國大藏都監奉/勅彫造」がある。巻第一、三は刊記の2行目が確認できず、巻第五は2行とも確認できないが、裏表紙との間に貼り込まれた箇所には隠されている可能性がある。各紙右端の經典本文前には「大雲經第三巻第二帳 大 含録」等と經典名・巻数・紙数・千字文・刻工名を刷り出す。各巻にみえる刻工名は巻第一「一意」、「一義」、巻第二「敦素」、巻第三「龍」、巻第四「含禄」、巻第五「克和」、巻第六「地起」である。各巻紙数は巻第一15紙、巻第二24紙、巻第三24紙、巻第四22紙、巻第五19紙、巻第六19紙。
- 購入金額 11,970,000円



- 13 ○種 別 <彫刻>
 ○名 称 如来立像 (によらいりゅうぞう)
 ○員 数 1軀
 ○時 代 朝鮮 三国(古新羅) - 統一新羅時代・7世紀
 ○品 質 銅鑄造・鍍金
 ○寸 法 等 像高20.5 肩張5.4 面奥3.4cm
 ○作品概要 如来形立像。肉髻部・地髪部ともに無文。肉髻珠相および白毫相は認められない。耳朶は長大に作り、貫通させない。三道はあらわさない。裙・衲衣を著ける。衲衣は通肩衣とし、左肩から背面を廻って右肩から正面へと至り、左肩から左前膊に掛かり、末端を背面に垂らす。背面では裙・衲衣とも衣文をあらわさず平板状を呈する。左腕垂下しわずかに前方に出し、指先を下にし掌を前に向け、全指を伸べる。右腕屈臂し、掌を前にして立てるがやや前傾させ、全指を伸べる。正面し上体をやや後ろに反らして立つ。
- 蠟型による一鑄か。内部を中空とするが、頭部下半から肩上部にかけて鑄造の際中型土に亀裂が生じたのか、頭部と体部の中空部が遮られてしまっている。銅厚は正面側が厚手、背面が薄手となっており、片寄りが甚だしい。全体的に鬆が多い。背面に外側から銅板で大きく象嵌(嵌金)する。頭部内の左耳上方から右耳にかけて筋金を確認できる。また体部の腹部と脚部の正中線上にも前後に筋金を確認できるが、これは背面に象嵌した銅板を支持する役割を持つものであろう。
- 髮際以下の全面に鍍金を施す。ただし肉髻部・地髪部にも部分的に鍍金が付着する。鍍金後、唇に赤色の彩色を行なう。
- 保存状態は、左手第一指・第五指の付け根より先及び右手第二-五指の付け根より先を欠失する。背面象嵌の銅板は中央付近で陥没する。体部正面の両腕内側および衣文の凹部に泥および錆が付着する。
- 体部に比して頭部が大きく、正面をゆったりとU字形に流れる



衣文も深く明瞭にあらわすなど、古新羅時代から統一新羅時代初期にかけての金銅仏の特徴がよく表れている。

○購入金額 40,600,000 円

- 14 ○種 別 <陶磁>
○名 称 色絵将棋盤童子置物 (いろえしょうぎばんどうじおきもの)
○員 数 1 個
○作者・制作地等 伊万里(有田)・柿右衛門様式
○時 代 江戸時代 17世紀後半
○品 質 磁器
○寸法等 高17.8 幅12.6 奥行11.3cm
○作品概要

色絵磁器の置物。童子が将棋盤上で犬を抱きながら胡坐し、将棋の駒を持つ姿とする。将棋盤、犬、童子の3つの部分からなり、将棋盤は5面の板起しで、底板はない。犬、童子は型作り。童子は胴体、両腕、両足、頭を別々に作り、接合する。将棋盤上部、童子の両耳には空気抜き孔を開ける。底部から内面は露胎とし、それ以外に透明釉をかける。将棋盤側面は黒と赤の輪郭に赤、黄、緑、青彩で牡丹文を描く。上面は染付で9×9の升目を描く。童子の腹掛けは赤地に金彩の花と黒輪郭で青・緑彩の唐草の二つの花唐草文を描く。唇は赤彩、頬は薄い赤彩。黒彩で目、眉を描き、頭髪は緑地を使った艶のある黒。犬は赤、緑、金で彩り、赤と黒の斑文を表す。右手の将棋駒部分、左手親指は後補。左手首に窯割れがあり、将棋盤後・右側面下端には貫入多く入る。



○購入金額 8,400,000 円

- 15 ○種 別 <漆工>
○名 称 婦女園遊図堆朱長盆 (ふじょえんゆうずついしゅながぼん)
○員 数 1 枚
○時 代 中国 南宋時代・13世紀
○品 質 木製漆塗
○寸法等 縦37.0 横18.5 高2.7cm
○作品概要

長方形の盆。表面は、全体を朱漆塗とし、彫漆の技法を用いて文様をあらわす。盆の見込は長方形に区画し、内側には橋上で喫茶する婦人、太湖石、梅、海棠、金鷄冠鳥などをあらわし、その周縁部には、蓮華、菊、牡丹、芍薬などの花を類型化した葉とともに蔓状に廻らす。また、立ち上がりの外側は屈輪文で埋め尽くす。高台から底面にかけては黒漆塗。高台の内側には、沈金針刻で「戚寿造」、朱漆書で「泰斉」の銘がある。



○購入金額 33,000,000 円

- 16 ○種 別 <漆工>
○名 称 秋草蒔絵箱 (あきくさまきえはこ)
○員 数 1 合
○時 代 桃山時代-江戸時代・17世紀
○品 質 木製漆塗
○寸法等 縦81.0 横55.0 高37.5cm
○作品概要

長方形、被蓋造、底面の四隅に削形の脚を付けた大型の箱。総体黒漆塗。蓋表から四側面にかけて、土坡から伸びる秋草(菊、薄、萩など)と桐紋を、金平蒔絵に絵梨地、針描、付描などの技法を交えて大きく伸びやかに描く。なお、蓋表は短側面を天地とする。身の内には銀箔を散らした紙を内張りしている。魚子地に菊桐紋唐草を線刻した金銅製金具を、蓋の四角、蓋長辺中央、身下部の四角、脚などの要所に打つ。一方の長側面中央



には、菊花紋線刻の金銅製紐金具を付けるが、もう一方の紐金具は欠失する。

○購入金額 43,000,000円

- 17 ○種 別 <染織>
○名 称 浅葱苧麻地窓絵枝垂桜模様紅型衣裳
(あさぎちよまじまどえしだれざくらもようびんがたいしょう)
○員 数 1領
○作者・制作地等 沖縄
○時 代 琉球第二尚氏時代-明治時代・19世紀
○品 質 苧麻(単糸 撚無)、平織(織密度 経糸12本、緯糸12本)、型染(両面)
○寸法等 身丈121.2 衿53.5cm
○作品概要 浅葱苧麻地両面染め単衣仕立て。袖は広袖で、脇にマチをつけ、衿は広衿の返衿にする。身頃は前後左右とも身幅を狭くし、身丈はおはしよりする。紫地水仙霰文と朱地白抜き菊花霰文の二種の窓絵と、枝垂れ桜を配した大模様を、肩山を境に前後天地をあわせて、肩、胴、裾の三段に配置する。肩山に一部虫喰があるが全体に状態は良好。
この大模様(縦53.0 横42.0)は、大正末から昭和初めにかけて鎌倉芳太郎が収集した紅型資料中の「窓絵枝垂れ桜模様白地型紙」(収蔵番号1034)とほぼ一致する。染材については植物染料の他、顕微鏡およびハンディ型蛍光X線分析調査によると、朱色、黄色にはそれぞれ粒子が認められ、顔料も使用していると考えられる。



○購入金額 4,500,000円

- 18 ○種 別 <染織>
○名 称 白木綿地桜芒鳥模様紅型衣裳
(しろもめんじさくらすすきとりもようびんがたいしょう)
○員 数 1領
○作者・制作地等 沖縄
○時 代 明治-大正時代・20世紀
○品 質 綿(単糸 Z撚)、平織(織密度 経糸14本、緯糸12本)、型染(両面)
○寸法等 身丈120.0 衿61.0cm
○作品概要 白木綿地両面染め単衣仕立て。袖は広袖で、脇にマチをつけ、衿は広衿の返衿にする。身幅は布幅(35.0cm)をいっぱいを使い、丈はおはしよりする。紫と赤紫の二種の桜に鳥、芒を配した中模様(縦18.0cm 横46.0cm)を繰り返して連続模様をあらわす。前後身頃の絵柄は、肩山で反転させず、天地逆に配される。
染材については植物染料の他、顕微鏡調査では芒模様の赤色、鳥模様の黄色には粒子が認められ、顔料も使用していると考えられる。またハンディ型蛍光X線分析調査では鉛が検出され、一部の色差しには媒染剤(硝酸鉛)を使用している可能性もある。
なお、衿下に縫いつけられた紙札に「琉球紅形」と記されるが、「ビンガタ」という呼称が広く知られるようになったのは大正14年以後、鎌倉芳太郎、芹沢銈介の研究以後であるため、大正末昭和初期以後、市場に出たものと考えられる。



○購入金額 1,800,000円

- 19 ○種 別 <染織>
 ○名 称 浅葱地菊桜紅葉貝沢渦文紅型衣裳
 (あさぎじきくさくらもみじかいおもだかもんびんがたいしょう)
 ○員 数 1領
 ○時 代 琉球 第二尚氏時代・19世紀
 ○寸 法 等 丈 126.0 桁 66.0 袖丈 46.5 後幅 62.0 襟幅 16.5 襟下 23.0
 ○作品概要 木綿(単糸/経:撚有Z、24本/cm 緯:撚有Z、21本/cm)。平織。
 紅型片面染。浅葱木綿地片面紅型の単衣仕立て。交領。襟は内側に折り返したくけ襟。襟丈が長く、襟下が短い。袖は付けづめの広袖で脇にはマチ(ワチスビ)をつけない。袖口、襟端、裾ともに折伏するが縫い始末がない。現在の縫糸の他に衽付、腰上げの縫跡が認められる。文様には中模様の型紙を用い、菊花(正面形および側面形)、桜(五弁、八重と結び文)、紅葉、沢渦に貝、海藻、桔梗等を朱、紅、紫、黄、黄緑等で染め付けている。



○購入金額 4,410,000円

- 20 ○種 別 <考古>
 ○名 称 須恵器皮袋形瓶 (すえきかわぶくろがたへい)
 ○員 数 1点
 ○作者・制作地等 東山窯(愛知県)
 ○時 代 古墳時代・6世紀
 ○寸 法 等 長 25.8 幅 9.3 高 12.4
 ○作品概要 楕円形の粘土板をきっちりと合わせて両端が尖る紡錘形の体部をつくり、別造りの口縁部が付けられている。全体がカキ目によって、ていねいに仕上げられる。両側辺と中央ならびに底部には、櫛状工具による列点文によって皮袋容器の合わせ目を痕跡として表現している。また、肩部は四方向に小さな粘土塊が貼り付けられている。焼成は堅緻で、ひずみも少ない。



○購入金額 2,000,000円

- 21 ○種 別 <歴史資料>
 ○名 称 ベトナム村落関係文書(べとなむそんらくかんけいもんじょ)
 ○員 数 30通
 ○時 代 ベトナム 後期黎朝時代-阮朝時代(1642-1924年)
 ○品 質 紙本書写または木版
 ○寸 法 等 各 縦 29.0-56.0 横 34.0-135.5cm
 ○作品概要 神勅はベトナム皇帝が村落の神々に位を受けた際に下された文書で、後期黎朝から阮朝にかけてのもの(17-20世紀)がある。これらは、村々の祠などに保管されてきた。同じ年月日付けのものが複数あるのは、皇帝の誕生日などを祝ってまとめて発行されたりしたためである。また、宛てられた地域が文中に特定されているものが多く、ハノイやフエ周辺の地名がある。このほか「当境城隍郷」とだけ記されていて、地域の特定ができないものも少なくない。城隍(タインホアン)とは村の氏神のような存在である。
 黄色く染めた継ぎの無い一枚紙に銀泥で竜や雲をあらわし、漢字で本文を書して「勅命之寶」等の朱印を捺す。本文は手書きのものが多いが、なかには木版刷りもある。表裏にあらわされ



陽徳3(1674)年7月29日勅封写

た銀泥の文様は刷られたものと手書きがあり、刷った後に一部を手書きしたものもある。銀泥による文様は、表面は四周に紗綾形紋や雷紋などを巡らしたものが多く、その内側に竜や雲、祥瑞紋を描く。裏面には紗綾形紋を巡らすものもあり、四神や雲、祥瑞文、宝箱などをあらわす。巻末から巻いて保管するものらしく、巻き上げた際に表に出る箇所には題箋が描かれ、与えられた地域の地名が墨書されたものもある。

17世紀から18世紀初期の年号を有するもの(1-4)を中心に、銀泥の文様が粗雑で、明らかに後世の写しと認められるものもある。なお、神勅のほか度牒と機密院档案が各1通ある。

○購入金額 3,570,000円

- 22 ○種別 <歴史資料>
 ○名称 東寺関係文書(とうじかんけいもんじょ)
 ○員数 1巻
 ○時代 平安～室町時代・12-16世紀琉球第二尚氏時代-明治時代・19世紀

- 寸法等
- (1) 慶我寄進状(けいがきしんじょう)
 - 員数 1紙
 - 品質形状 縦紙
 - 法量(cm) 縦32.2 横51.1
 - 年代 永正8年(1511)9月28日
 - (2) 龜山上皇院宣(かめやまじょうこういんぜん)
 - 員数 1紙
 - 品質形状 縦紙
 - 法量(cm) 縦32.2 横45.7
 - 年代 (文永11年(1274))11月4日
 - (3) 御修法所巻数(みしゅほうしよかんず)
 - 員数 1紙
 - 品質形状 縦紙
 - 法量(cm) 縦32.2 横56.0
 - 年代 建暦3年(1213)8月11日
 - (4) 仁王経御修法佛供御明供米等支配注文
 (にんのうきょうみしゅほうぶつこごみょうくまいとうしはいちゅうもん)
 - 員数 1紙
 - 品質形状 縦紙
 - 法量(cm) 縦32.2 横48.2
 - 年代 嘉應2年(1170)
 - (5) 光厳上皇院宣(こうごんじょうこういんぜん)
 - 員数 1紙
 - 品質形状 縦紙
 - 法量(cm) 縦27.1 横44.4
 - 年代 (康永2年(1343))5月9日
 - (6) 青蓮院雑掌重言上状案
 (しょうれんいんざっしょうじゅうごんじょうあん)
 - 員数 1紙
 - 品質形状 縦紙
 - 法量(cm) 縦27.1 横46.0
 - 年代 (文龜3年(1503))
 - (7) 青蓮院雑掌言上状案
 (しょうれんいんざっしょうごんじょうじょうあん)
 - 員数 1紙
 - 品質形状 縦紙
 - 法量(cm) 縦27.1 横46.0
 - 年代 文龜3年(1503)9月
 - (8) 青蓮院雑掌重言上状案



(1) 慶我寄進状



(5) 光厳上皇院宣

(しょうれんいんざっしょうじゅうごんじょうじょうあん)

- 員数 1紙
- 品質形状 縦紙
- 法量 (cm) 縦 27.1 横 45.7
- 年代 文亀3年(1503)10月

(9) 東寺雑掌言上状案

(とうじざっしょうごんじょうじょうあん)

- 員数 1紙
- 品質形状 縦紙
- 法量 (cm) 縦 27.1 横 45.7
- 年代 文亀3年(1503)10月

(10) 越中守護斯波義将書状

(えっちゅうしゅごしばよしまさしよじょう)

- 員数 1紙
- 品質形状 縦紙
- 法量 (cm) 縦 29.7 横 42.9
- 年代 (永和2年(1376))卯月3日

(11) 鎌倉息若君来臨勘例

(かまくらそくわかぎみらいりんかんれい)

- 員数 1紙
- 品質形状 旧状:袋綴冊子
- 法量 (cm) 縦 29.7 横 42.0
- 年代 (弘安3年(1280))

(12) 紀伊守護大内義弘奉行人奉書案

(きいしゅごおうちよしひろぶぎょうにんほうしよあん)

- 員数 1紙
- 品質形状 縦紙
- 法量 (cm) 縦 29.7 横 41.2
- 年代 明德4年(1393)10月4日

(13) 仁王経法御供米注文

(にんのうきょうほうごくまいちゅうもん)

- 員数 3紙
- 品質形状 縦紙
- 法量 (cm) ①縦 28.7 横 42.0
②縦 28.7 横 42.1
③縦 28.7 横 38.3
- 年代 建保4年(1216)3月

(14) 室町幕府御教書案(むろまちばくふみぎょうしよあん)

- 員数 1紙
- 品質形状 縦紙
- 法量 (cm) 縦 32.9 横 51.5
- 年代 永正8年(1511)9月28日

○作品概要

(15) 口宣案(くぜんあん)

- 員数 1紙
- 品質形状 縦紙
- 法量 (cm) 縦 32.2 横 51.1
- 年代 暦應2年(1339)10月28日

(16) 某繪旨(ぼうりんじ)

- 員数 1紙
- 品質形状 縦紙
- 法量 (cm) 縦 32.2 横 39.1
- 年代 永仁6年(1298)9月12日

内容から東寺に伝来したと考えられるが、全16通には約250年にわたる時代の開きと内容の違いが認められる。現状に成巻されたのは現代のことであり、いつの段階で、これらの文書が一つにまとめられたのかは不明である。(1)は東寺僧慶我の寄進状。(2)は蒙古襲来に際して異国賊徒調伏の祈禱を命じた亀

山上皇(1249-1305)院宣。(3)は太上天皇息災等のための祈禱の完了を報告したもの。(4)と(13)は仁王経御修法の費用を書き上げたもの。(5)は東寺寺辺の巷所に関する光厳上皇(1338-74)院宣。(6)から(9)は文亀3年(1503)の山城国東西九条女御田についての東寺と青蓮院との相論文書。(10)は越中国三田社地頭職についての守護斯波義将(1350-1410)書状。(11)は源頼朝(1147-99)子息が門弟に入ることについての記録。(12)と(14)は紀伊国永穂郷国衙の事についての守護大内義弘(1356-99)奉行人の奉書案と室町幕府御教書案。(15)は醍醐寺座主職を任じた口宣案。(16)は山城国四塚田地に関する論旨。

○購入金額 6,500,000円

以上